

巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

中国漢の時代の説話集「説苑（ぜいえん）」にこんな話があります。

はたけの中の一木に蝉が止まっています。蝉は元気に鳴き、木の露を飲もうとしています。背後には蝉を狙ってカマキリが忍び寄っています。カマキリは蝉を捕ろうとすることに夢中で、近くに雀がおり、自分を狙っていることに気が付きません。雀はカマキリを食べようとする事にとらわれ、獵師が自分を追っていることを知りませんでした。

つまり三者とも、目の前の欲求に心を奪われ、別の危険が迫っていることに気が付いていないのです。

ともすれば我々は目先の利益や利害にとらわれ、その背後にある大切なものを見失っていることがあるのではないかと、また面倒な余り嫌なことから逃げるばかりにとらわれ、それに立ち向かおうとせず、逆に見えない大きなチャンスを逃してしまうことがあるのではないかと、他人に対する一方的な思い込みや偏見によって、知らず知らずのうちに判断を誤り、人間的成長の機会を逸しているのではないかなど、多方面から多くの反省を迫ってくるお話です。

人を測る物差しは一つではなく、事に当たっての考え方、それに伴う行動の方法は多様です。

いろんな考え方、対処の仕方があるはずで、その時にはうまくすり抜けたと喜んで、後になって後悔することもあり、面倒なことを引き受けてしまったものだと後悔しても、後になって大きな充実感に満たされ、幸福を感じる結果となることがあります。

即効性や即戦力といったスピード感を求められる現代社会ですが、一つの考え方にとらわれ近視眼的になることなく、周囲や先々に思いを巡らし、落ち着いて物事に取り組んでゆく姿勢を失わないように心がけることが大切です。